

高 信太郎さん ■漫画家

「手遅れ医者」という落語を存じますか。どんな患者が来ても「手遅れだ」と言う。その医者には、屋根から落ちた人を連れていくと、これまた「手遅れ」の診断。仲間が「今落ちたばかり」と言うと、医者「落ちる前に連れてくればよかった」と返す。これがオチです。

私は、この医者は名医だと思っ。屋根の上にいるのは、たばこを吸っている人。屋根から落ちたのは、病気になった人。「落ちる前に屋根から下りなさい」と言っても、喫煙者は「落ちないから大丈夫」と思っている。ほかの人が落ちて「自分は大丈夫」と信じている。落ちる人が、受動喫煙という巻き添えを生む点も、たばこことよく似ている。喫煙者は「裏のおじいさんはたばこを吸っていても百歳まで生きた」などと言っけれど、比較できるのは、吸っている場合の自分の命と、吸わない場合の自分の命だけ。吸わない命のほうが長い。私も喫煙者だったから吸う人の気持ちは分かるが、喫煙者はへ理屈をこねる。たばこを「文化」と結び付ける人も

ひっそり何度も挑戦を

多い。しかし、たばこが日本に伝わったのは、鉄砲と同じ一五〇〇年代。紫式部の時代にはなかった。たばこで文化が育ったわけじゃない。一番の問題は、子どもの前での喫煙。罰則をつくってほしい。子どもは何も知らないまま、たばこのおいを親の香りと思ってしまう。

たばこは「口が欲しがる」ものではない。実は脳が欲しがっている。さも体が欲しがっているように、脳が命令を出しているだけだ。

タバコがやめられる！

禁煙には二つの方法がある。「意志でやめるか」「医師でやめるか」。グループでの禁煙は駄目。必ず脱落する人がいて、「これを最後の一本にしよう」などと歩み寄ってしまう。やめるなら、一人でひっそりと。何度失敗しても構わない。「やめること」をやめないでほしい。やめればきつと、最初から吸わない人より素晴らしい世界が見えてくる。(11月8日、神戸新聞松方ホールでの「喫煙対策シンポジウム2007」で)

(まとめ・磯辺康子)



こう・しんたろう 1944年、愛知県生まれ。約20年の喫煙生活後、禁煙して24年。著書に『禁煙』実践ガイドなど。

トーク&トーク